濱谷浩《雪国》と民俗学
――報道写真における風土の表現をめぐって――

黄士誠（筑波大学）

『雪国』（毎日新聞社、1956年）は、濱谷浩（1915-1999）が1940年から1956年にかけて撮影した写真集であり、江戸時代から現代まで続く新潟の行事や風習を記録したものである。1930年代、東京のモダニズムに関心を持った濱谷は、浅草界隈の盛り場に足繁く通って都市風景や人物を撮影した。その後、1940年には満鉄の招待により初めて日本の外へ出て宣伝写真に関わった。本発表は濱谷の代表作となった『雪国』に焦点をあて、報道写真が民俗学との相互作用によってどのように変化したかを解明するものである。発表者は、濱谷が写したモティーフが戦前の東京風景から戦中の宣伝写真を経て、戦後に新潟の風土へと展開したことに着目した。

『雪国』に関して、近年の研究で指摘されているのは民俗学と文化的ナショナリズムの繋がりである。それらを踏まえた上で、『雪国』に関する新たな解釈を提示することにより、濱谷が対象を客観的に記述しようとする姿勢を保ちながらも、人間性を凝視しようとした、独自の報道写真の手法と美学を持っていたことを明らかにできるだろう。

濱谷の『雪国』が広く知られるようになる前に、熊谷元一（1909-2010）、三木茂（1905-1978）らが民俗史的な記録写真を始めていたが、自らの被写体を「民俗」とはっきりと認識した写真家はおそらく濱谷が最初である。1939年に濱谷は初めて雪国を訪れ、民俗学者でもある渋沢敬三（1896-1963）と出会い、写真の様式が大きく変わる転換点となった。発表者はこの時に渋沢が持っていた雪国の最初の民俗記録である『北越雪譜』（1837年）を濱谷が見た可能性を指摘する。

『雪国』は濱谷の実体験に基づいているが故に、表面的かつ客観的な写真に真実性が加わっていた。彼はこの取材と資料収集で直面した困難を強調し、雪国における写真の価値をさらに高めようとした。

1940年に雪国を撮影し始めた濱谷は、当時の多くの都会人と同じように、首都東京の生活が徐々に断片化し、表面的なものとなってゆくことを悟っていた。『雪国』は日本の農村と密接に関連した地域共同体として、濱谷の郷愁を喚起した。当地に残っていた最後の痕跡は、日本のどこかにかつて存在した伝統的な生活様式であり、同時に都会への批判ともなった。

写真集『雪国』には被写体となった人々の名前や写真の日付がないために、観者は時代を超越した視点で見ることになる。こうした意味で『雪国』は、日本人の変化する生活の記録ではなく、「日本人の生活の古典」の例示として行事を記述したものと解釈できる。『雪国』は報道写真と民俗学の二つのジャンルを跨いでおり、その二重性はそこに住む人々と彼らを包む環境との相互作用をも暗示していると結論付けたい。